〈特集研究ノート〉

竹村和子先生とフェミニズム

山口　菜穂子

1.「私はナチュラル・ボーン・フェミニストです」

筆者が竹村ゼミに参加したのは2001年のことであるが、ほどなくして驚かされたのは、竹村先生が「私は自分のことをジェンダー研究者ではなくフェミニズム研究者だと思っている」と繰り返していたことだった。というのも、第二波フェミニズムの熱気を直接には知らず、また「男女平等」という目標が先人たちの努力によって公的領域に浸透しつつあった頃に成長期をおくった団塊ジュニア世代である私は、1999年に男女雇用機会均等法が改正され、また同年に男女共同参画社会基本法が施行されたこともあり、「フェミニズムはもう終わり。これからはジェンダー・セクシュアリティ研究を竹村ゼミで勉強するのだ」と素朴に考えていたからである。ちょうどこれらの法改正が行われるのと並行して、90年代は学術的にもまるでフェミニズムは時代遅れと言わんばかりに「クィア・スタディーズ」と「ポストコロニアリズム理論」が日本の人文・社会学系の間で興隆を極めていた。イヴ・K・セジウィックを題材に文学作品のクィア読解で卒業論文を書き、イギリスの帝国主義とジェンダーについて修士論文を書いた私からすれば、フェミニズムの重要性をあらためて強調する竹村先生が意外に思えたのだ。

竹村先生が自らを「フェミニスト」だと規定することにこだわっていた理由について考えてみる。「ジェンダー研究」という言葉に対して、否定的な評価を下していたわけではけっしてなかったものの、どうもそこに「価値中立的な響き」を聞き取っており（竹村 2003、p. 2)、現実の性差別撤廃に取り組んでいる「運動」としてのフェミニズムとアカデミアでの研究との回路が切断されるかもしれないことに、先生は懸念を抱いていたように思われる。先生自身「現実には、権力関係がそこに存在しているから、問題」なのだと書いているように（竹村 2003、p. 2)、表面上、男女の平等が達成されつつあるように見えるだけで、従来の男女差別とは別の権力関係が発生し始めている点をことあるごとに強調していた。とはいえ、旧来のフェミニズムのように、「女」であることを所与のものとして教条的に主張することはなかった。むしろ、竹村先生が目指していたのは、「女」というカテゴリーの徹底的な脱構築であり、「女の解放」を目指しつつも、同時に「『女の解放』という姿勢自体を問題化していく」ことだったのである（竹村 2000、p. vii)。

2.「誰も助けてくれるひとはいません。あなたはひとりなのです」

カテゴリーとしての「女」を脱構築しつつ、フェミニズムを所与の「女」以外のものにも開いていくために、竹村先生が批判の対象として焦点化したのは「異性愛主義」であった。資本主義と分かちがたく結びついた異性愛主義が、「女」を還元不可能なものとして社会的に構築するプロセスの、言語的・経済的・物質的な規制を詳らかにしていったのである。その際、言語的／想像的観点からそのプロセスを文学批評や映画批評において分析するために、ジェンダー研究、セクシュアリティ研究、クィア批評

のみならず、精神分析、マルクス主義批評、ポストコロニアリズム理論を駆使しながらフェミニズム批評そのものの射程を拡げていくことになった。しかしながら、こうした批評を行うときの竹村先生の手つきは、たとえば「文学研究」というディシプリンを盤石にするためのものではなく――すなわち「フェミニズム」それ自体を脱構築していくのと同様に――動員する批評理論のディシプリンもまた脱構築していくようなものであった。いわば、帝国主義的な、普遍を掲げて異質な他者をも帝国の言説へと取り込み基盤を強化していくようなやり方とは正反対に、文学研究や批評理論のディシプリンそれぞれが危機にさらされるような軌道へと次々と乗せていくやり方だった。そこで目指されていたのは、「文学性」のなかに、名づけられることのない欲望を見出し、未だ到来することのない関係性を構想し、言語の象徴秩序内では生存不可能なものが生き延びることを可能にしようとすること、すなわち、共約不可能なものを立ち上げようとすることだった。

竹村先生はこうした共約不可能なものを顕現させるために、多文化主義的な複数の集団的アイデンティティを個々に対立させ対話させる方法はとらず、むしろそれらが内部で重なり合い、ときに反目しあう「わたし」の抱えた亀裂に可能性を見ようとしていた。そして、そのような（内なる他者を伴った）「『わたし』を構成する要素のあいだの無限のアゴーン（葛藤）」として「同一性と他者性の境界や重なりをたえず査定しなおす無限運動」を批評の倫理だと竹村先生は捉えていた（竹村 2013、pp. 27-8）。「女」である「わたしたち」は安易に共約可能だとはけっして考えていなかったし、それが竹村先生の批評の強度の源泉だったのである。

したがって、この節の冒頭にある「誰も助けてくれるひとはいません。あなたはひとりなのです」と筆者に言ったその言葉の意味は、単に一人前の研究者になるための指導上の叱咤激励を超えて、安易に共約可能な価値判断に頼ることなく、内なる他者にまずは敏感であれという倫理的教訓であったと解釈できる。第二波フェミニズムが収束したのち、リベラルフェミニズムが個人主義を極度に推し進めていった結果、「自己実現」や「ライフスタイルの選択」等の、グローバル化における消費主義的な主体的地位の占有が「女」の主体形成の目標になってしまった現在のポストフェミニズム的状況（McRobbie 2009, p. 1）において、「わたし」だけではない「わたしたち」のフェミニズムとして、どのようなものが想像できるのだろうかと筆者は戸惑い続けていたし、現在もそうである。今になってようやく理解できるのは、竹村先生が筆者に対して、早急に集団的アイデンティティを措定する前に、あくまでも孤独に共約不可能な他者性について思考するよう要求することによって、共約不可能性をともなった「わたしたち」を想像するための隘路を示してくれていたのだということなのである。

３．「女の連帯を創り出したいのです」

個別の議論において、「女たち」というものを言挙げすることが滅多になかった竹村先生は、その一方で、「女の連帯」の夢について常々語ってもいた。2003年に出版した『“ポスト”フェミニズム』では多くの論者が多様な観点から参加・寄稿し、フェミニズム理論と政治との関連を強調するかのように、当時の最先端の批評理論を結集しただけでなく、行政や現実の制度運用まで取り上げた。様々な異なる専門分野の研究者と多様な角度からフェミニズムについて語り合う竹村先生の、知的好奇心に満ちた興奮している姿に涙を禁じ得ないが、フェミニズムに関心のあるものたちの共同作業――すなわち連帯――で出来上がったこの本が提出している論点や問題点は、未だ解決の筋道の立たない、困難で重要なものば

かりである。

「女の連帯」を何よりも体現していたのは、2003年から2008年まで５年間に渡るお茶の水女子大学21世紀COEプログラム「ジェンダー研究のフロンティア」における活躍であろう。リーダーを務めた「理論構築と文化表象」のプロジェクトにおいて、数えきれないほどの多くの研究者に協力を仰ぎ、ディシプリンに囚われない多様な専門分野との学際的で国際的な共同研究を行った。プロジェクトのリサーチ・アシスタントだった筆者は、研究会やシンポジウムのあまりの多さと豊かさ（と忙しさ）に、当時はどれだけ重要なことが起きているのかまったく理解できていなかった。竹村先生の労力の消耗は筆者の忙しさとは比べようもない途方もないものであったが、今では、それがグローバル化による社会の変容によって「女」のカテゴリー生成がまったく異なった様相を見せ始め、資本が「個人」をむき出しにし、そのすべてを財に変え活用しようとする状況のもと、社会規範や制度や権利が骨抜きにされつつあるなかで、従来の近代福祉国家批判および資本主義批判だけでは到底カバーできない事態に正面から取り組むためのものであったことが理解できる。そしてこの共同研究のプロジェクトこそが、竹村先生が希求した「女の連帯」――生物学的に言うところの「女」ではなく、「女」の問題に取り組もうとするものはみなパフォーマティヴに「フェミニスト」であるという意味での連帯――だったと言えるのだろう。

４．竹村先生が残した仕事

> 「彼女〔アーレント〕の主張は、もしも人間が共に行動しうるなら――これこそ、革命について彼女が理論化したことですが――、『わたしたち』として共に行動することしかないということです。実際のところ効力のあるエイジェンシーがあるとすれば、それは『わたしたち』というエイジェンシーしかありえません。」（バトラー 2008、p. 40）

竹村先生が異性愛主義の綻びを文学作品に見出すとき、それが未来への希望という形で、とりわけ未だ到来しない「親密権」の在り様を提示するとき、そこには孤独ではなくて、ひととひととの関係性、すなわち「わたしたち」がある。たとえば、ナサニエル・ホーソーンの『緋文字』読解においては、クィア・ファミリーという「婚姻制度と実子偏重の親族関係によって構造化されるのではない新しい親密権が現実化される『もっと明るい時代』」（竹村 2012、p. 70）に希望を見出しているし、ヴァージニア・ウルフの『ミセス・ダロウェイ』とロビン・リビンコットの『ミスター・ダロウェイ』の分析においては「異性愛／同性愛とか、家族制度の内／外とか、偽り／本物という既存の境界を横断する関係へと――いまだに名づけえないセクシュアリティへ、いまだにその形式が定かではない新しい家族関係へと――一歩踏み出していることを暗示している」（竹村 2012、p. 136）と、クィアな欲望の様相とその関係性について思考を巡らせている。ただし、注意しなければならないのは、これらの「新しい親密権」や「新しい家族関係」は、文学的想像力のなかでは生きることが可能でも、現在の社会制度下では存在し得ないものであるということだ。そして、制度への参入を求めるセクシュアル・マイノリティによる運動によっても、残念ながらこれらを存在可能にすることは難しい。あまりにもクィアとしか呼びようのないものなので、「わたしたち」を想定することが困難であるからだ。

かように、竹村先生はマイノリティのアイデンティティ・ポリティクスによる制度への参入には批判

的ではあったものの、フランスで施行された「パックス（PACS＝連帯の民事契約）」に留保付きではあるが、賛同を表明している。「パックスが与えている希望は、異性愛者／非異性愛者という、資本主義の（再）生産様式によって社会構築されたアイデンティティが、『同一性の原理』という本質主義的な手のなかに再回収されずに、ラディカルに変容する可能性を提示していることである」（竹村 2013、p. 35）。パックスは、性的指向にかかわらず「共に生きる者たち」に法的権利を与えるという点において、異性愛主義を空洞化させる可能性を持つ政策であり、たとえそれがフランス国内でのみ適用されているとはいえ、現実にそうした制度が存在していることが竹村先生にとっては希望であったことは間違いない。

最後に、今後竹村先生の研究の遺産を発展させていくために、別のある道筋を――異性愛主義に再回収されることなく「わたしたち」を想定することを可能にさせるもの――を紹介しようと思う。岡野八代氏が著書『フェミニズムの政治学――ケアの倫理をグローバル社会へ』において構想する、「フェミニズムに潜在する新しい共同性」である（岡野 2012、p. 2）。彼女は「自立した個人」を想定するリベラリズムの基礎となっている公私二元論において、依存関係にある存在が忘却・隠蔽されている点を指摘し、人間が傷つきやすく依存する存在であるという事実を社会関係の中心に据えることを提案する。岡野氏が提示するこの「わたしたち」の関係性――傷つきやすいものへの責任を社会で分有するケアの倫理――は、主に性別役割分業に支えられてきたがゆえに異性愛主義の（再）生産様式である、リベラルな社会制度を根底から作り変えようとする試みである。とはいえ、近年の女性の労働市場への進出（いわゆる共働き）の増加によって、ケア労働がますます外部化され、性別役割分業はもはや消えかけていると考えるひともいるかもしれない。

そうした疑念に対して女の労働の観点から三浦玲一氏は異議を唱えている。岡野氏の問題意識と共鳴する三浦氏の議論によれば、新自由主義とその市場原理主義の趨勢によって、フレキシブルな労働力として「女性の労働者」が特権化される一方で、家事労働、出産、育児等のケア労働はなくなったのではなく不可視化されつつあり、その結果、女は「労働」を介して分断された状況に置かれている。彼は、こうした女の分断を引き起こしている「労働」を再定義し直すためにも、社会運動としての「階級をこえた女の連帯を構想する」必要性を提唱する（三浦 2013、p. 76）。それは必然的に、ケア労働に従事し、搾取されている外国人の女性労働者の存在も議論に含まれるものであり（岡野 2012、p. 187）、国内のみならずいまやグローバルに階層が形成されている女の連帯を志向するものとなる。したがって、竹村先生が残した、フェミニズムが「国家と隠微に連携しているグローバル資本とどう邂逅していくか、それに再占有されることのない理論を現実から乖離しないでどう発信していくか」（竹村 2012、p. 282）という問いを今後発展させていくための可能性のひとつが、女性の「労働」を捉え直し、フェミニズムの「新しい共同性」の中に組み込みつつ展開していくことにあるように思われる。再びフェミニズムを「わたしたち」のものにするための試みは、まだ始まったばかりである。

（やまぐち・なほこ／明治大学兼任講師）

引用文献

岡野八代『フェミニズムの政治学――ケアの倫理をグローバル社会へ』みすず書房、2012年。
ジュディス・バトラー、ガヤトリ・スピヴァク『国家を歌うのは誰か？――グローバル・ステイトにおける言語・政治・帰属』

竹村和子訳、岩波書店、2008年。
竹村和子『フェミニズム』岩波書店、2000年。
———.「なぜ“ポスト”フェミニズムなのか？」竹村和子編『“ポスト”フェミニズム』作品社、2003年。
———.『文学力の挑戦——ファミリー・欲望・テロリズム』研究社、2012年。
———.『境界を攪乱する——性・生・暴力』岩波書店、2013年。
三浦玲一「ポストフェミニズムと第三波フェミニズムの可能性——『プリキュア』、『タイタニック』、AKB48」三浦玲一・早坂静編『ジェンダーと「自由」』彩流社、2013年。
McRobbie, Angela. *The Aftermath of Feminism: Gender, Culture and Social Change*. LA: Sage, 2009.